

## 第4節 世界の養蚕業の変遷

### 第1. 概説

養蚕が中国ではじまったことはすでに述べたが、交通不便の為ながく中国の一部の地方に局限されていた。絹製品が中国から国外へ出るようになったのは紀元前2世紀ごろで、シルクロードを通過してまず西部アジアにわたり、その後ヨーロッパ地域へもはいつた。当時、絹は非常に貴重なものとされていたが、それは同じ重量の金と交換されていたということからも推察される。

1世紀の中ごろ、東トルキスタン地方の干闥<sup>うてん</sup>（ホータン）国王に嫁した中国婦人が、当時国外搬出を許されていなかった桑と蚕の種を、棉帽子の中に入れてひそかに持ち出したのが、養蚕が中国国外へ伝播した最初であるといわれている。

インドの養蚕が中国から伝わったものか、それとも単独に発生したものかは明らかではないが、インドは文化が早く開けたこと、また特有の蚕が存することならびに野生の桑が多いことなどから、「絹の歴史」の著者であるパリーゼ（1862年）のいうように、インドの養蚕が中国のそれと無関係に発生したという説を否定することはできない。

一方、ヨーロッパの養蚕は、東洋から輸入されたものであることは、学者の意見が一致している。紀元500年ごろ二人の僧侶がインドから蚕種を竹杖の中にかくして、東ローマの首都コンスタンチノーブル（イスタンブール）にもってきたのが、ヨーロッパに蚕種がはいつた最初であるという説がある。8世紀のアラビア帝国時代には、養蚕は東はペルシア、コーカサスから西はスペインまで広く行われるようになっていた。特に10世紀のはじめに、南部イタリアにおいて養蚕が盛んになり、その後北部イタリアへも波及した。

フランスの養蚕は13世紀のルイ9世のころはじまりしだいに盛んになったが、ルイ14世（1685年ごろ）の時代に多数の新教徒は迫害を逃れて国外へ脱出したため、一時フランスの養蚕は衰えた。これらの脱出者はイギリス、ドイツ、スイス、オランダなどで養蚕を行ったが、風土が養蚕に適さず発展をしないまま次第に衰退した。

### 第2. フランスの養蚕業

すでに述べたようにフランスの養蚕業は13世紀ごろから次第に盛んになった。その最盛期は1853年で、産繭額は2.6万トンに達したが、その後微粒子病の蔓延によって惨害をこおむり、1865年には5.5千トンに激減して養蚕業は壊滅にひんした。その後、パスツールにより袋取りによる微粒子病防除法が確立され、徐々に産繭額を回復し、1877年には1.14万トンに達した。しかし、第一次世界大戦の影響を受けて、1915年には、1.7千トン

に低下し、官民一体の努力にかかわらず 1924 年の 4.2 千トンを超えて減少の一途をたどり、第二次世界大戦をへて養蚕業はフランスから姿を消した。

このようにフランスの養蚕業が衰退したのは、桑からぶどう栽培への転換ならびに 1870 年以降中国に続いて日本からの生糸輸入の急増によるため、最後に残った南フランスの養蚕地帯もついに回復できず、南フランスにただ一つ残っていた製糸工場も 1965 年に閉鎖された。

### 第3. イタリアの養蚕業

イタリアにおける繭の生産、生糸や絹の貿易はフランスより約 1~2 世紀早くはじまっており、西ヨーロッパでは最も古い歴史をもつとともに、フランスの養蚕業が壊滅してしまった現在、西ヨーロッパでは唯一の養蚕国である。

イタリアの養蚕業は 10 世紀ごろ南部のメツシーナ地方から次第に盛んになり、北部のロンバルディア、ヴェネトなどの州に普及した。イタリアにおいてもフランスと同様 19 世紀の中ごろ 5 万トンという最高の産繭額を示したが、やはり微粒子病の惨害を受け 1865 年には約半分の 2.6 万トンに減じた。しかし、微粒子病の予防法が確立するに及んで生産も次第に回復し、1900 年には 5.6 万トンになったが、第一次世界大戦の影響を被ってその産額は半減し 2.6 万トンに再び減少した。戦後各種産業の復興は目ざましいものがあり、産繭額も年とともに回復し、1920~1930 年ごろはイタリア養蚕業の最盛期で、養蚕戸数約 60 万戸、繭生産額 4~5.7 万トン、生糸生産額 6.7~9.5 万俵を示した。

第二次世界大戦後は 1947 年の 2.69 万トンを最高に 1966 年まで年々著しく減少し 2.2 千トンになった。このように戦後急激に養蚕が減少した原因は、農業労働力他産業への移動による労働力の不足ならびに養蚕技術改新への努力の不足などがあげられる。

### 第4. 中国の養蚕業

中国の養蚕の起源は、他の国に比べてきわだって古い。しかし、中国の養蚕がその長い歴史の中でどのように変遷したかについては文献や統計などがほとんどなく様相は明らかでない。資料がある程度豊富になるのは、清代の後半からである。

明治前においては、清国生糸はアメリカ市場を独占していたが、その後次第に日本の輸出がのび、1900 年を境にして輸出量は逆転する。生糸の生産量についてみると、明治初期においては、清国の生産量が日本の数倍であったものが、1903 年以降日本が清国を追い越し、その 10 年後には約 2 倍の生産をあげるようになった。

このような変遷について、1917 年アメリカの生糸検査所より中国の養蚕、製糸業調査の

ため派遣されたドティー氏の報告書に次のようなことが述べられている。中国は永年世界第一の養蚕国の地位を占めていたが、技術改良の努力をおこたってきた。それに反し日本はヨーロッパへ学者、技術者を送り科学技術の推進をはかり、養蚕、製糸についての技術向上を官民協力して行っている。中国は気候的にもまた労力が豊富な点からも、最も養蚕に適しているが、技術的な面からこれらの利点が十分生かされていない。

当時の中国の養蚕業の実体は不明の点が多いが、種々の情報を総合すると大体次のような状態と考えられる。桑園面積は60万ha前後、繭生産量は16万トン前後で、浙江、江蘇、四川及び広東の4省を中心に生産が行われており、この4省で全生産量の8割を占めているとみられる。

四川・広東の両省においては四季を通じて養蚕が行われているが、一般的には珠江流域が多化性を用いて8~9回、長江（旧揚子江）流域が2化性を用いて4~5回、黄河流域と黄河以北地域が1化性を用いて1~2回の飼育を行っている。また、桑の種類も地域によって異なり、南方では荊桑が主として用いられ、華中から華北にかけて「ろそう」、「からやまぐわ」が栽培されている。

養蚕技術については、日本にくらべて大分遅れているが、豊富な労働力を用いてそれぞれの自然環境ならびに社会、経済状態に適合した合理的な生産がなされている。

一方、品種についてみると生糸量歩合は14%前後、繭層歩合18%前後と日本で普及している品種に比べるとかなり小粒で繭層も薄い。しかし桑園面積を165万ha、繭生産量を45万トン程度にのばす年次計画がなされ、現在は世界第一の蚕糸国となっている。

## 第5節 養蚕業の現況と動向

### 第1. 世界の養蚕業の動向

2001年（平成13年）の世界主要国の繭及び生糸の生産量は、それぞれ約82万トン及び132万俵である（1-10, 1-11図）。これらの繭及び生糸は、世界の約30か国生産されているが、その主な国は中国、インドで、これらの2か国で繭については91%、また生糸については90%が生産されている。

### 第2. 日本の養蚕業の動向

近年日本の農業は大きく変動してきたが、養蚕業もそれに伴ってその変容を余儀なくされている。特に明治以来輸出産業として発展してきた蚕糸業は、第二次世界大戦後次第に内需産業としての性格を強めながら変化し、昭和40年代の高度成長下においては、完全